

奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群の研究Ⅱ

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

(4) 出土土器・陶器

(a) 出土土器の土器組成と特色

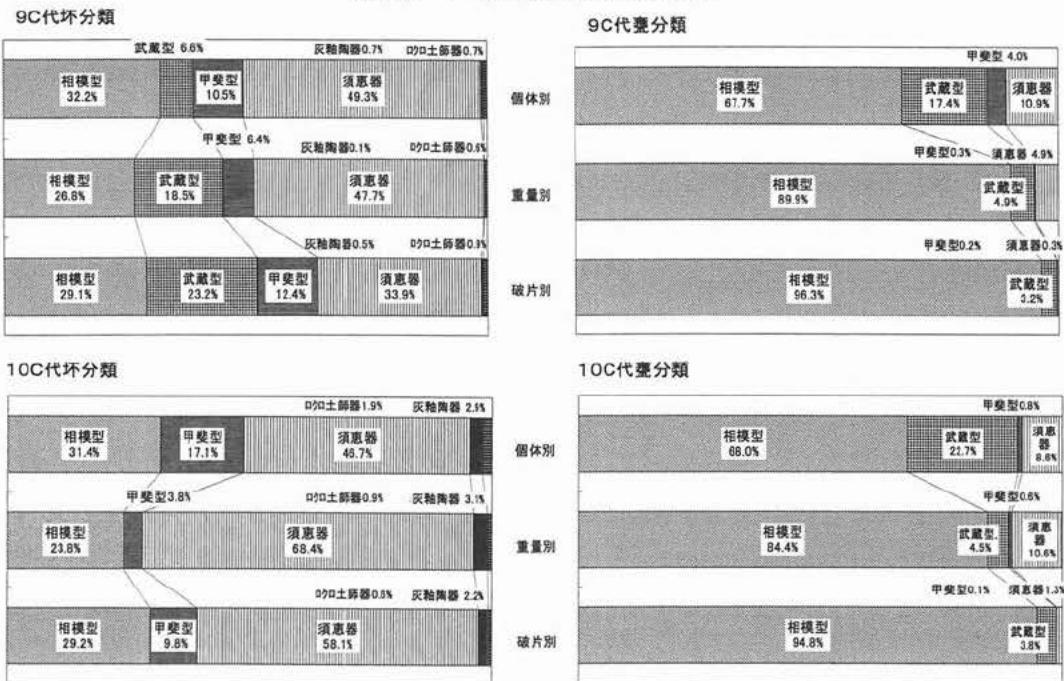
はじめに

土器組成については宮ヶ瀬遺跡群の各報告書で遺構毎に土器器種の数量について報告されているが、この小稿では壊類・甕類について型式や種別の検討を加え、相模国域内の遺跡と比較・検討を加えるものである。宮ヶ瀬遺跡群における各壊類・甕類における総点数、総重量、総推定個体数は第1表の通りである。第2表は宮ヶ瀬遺跡群のうち宮ヶ瀬地区の遺跡を中心とした竪穴住居44軒を対象とした出土土器を分類した統計グラフである。分類方法として土師器は相模型、武藏型、甲斐型の各型式及びロクロ土師器とし、その他は須恵器・灰釉陶器とした。器種は壊類と甕類を取り上げ、破片資料を含めた全出土土器について点数別・重量別・個体数別に数値を出し、さらに破片資料も扱うため9世紀代と10世紀代と時期を大まかに区分した。なお、推定個体数は重量を基にして平均重量で割り出す方法と、口縁部などの破片から推定した方法もあり、方法の上で不統一な点があるため若干信憑性に欠けることを考慮しておかなければならない。

第1表 出土土器の総点数・総重量・総個体数

器種 時期	壊類			甕類		
	破片点数	破片重量(g)	推定個体数	破片点数	破片重量(g)	推定個体数
9世紀代	767	8411	152	17281	93227	201
10世紀代	489	3400	105	7297	42882	128

第2表 9・10世紀代の土器組成比率



坏類の分類比率について

9世紀代と10世紀代における坏類の分類を比較すると次の点が指摘できる。1)両時期ともに須恵器坏の割合が過半数以上を示し、特に10世紀代では重量で7割近くとなり、相模国域にしては比較的多い割合を示す。2)10世紀代に土師器武藏型坏が見られなくなる。3)9・10世紀を通して甲斐型土器は1割前後見られるが、10世紀代の方は重量的に減少している。4)全体を総括すると相模型が3割強で、搬入土器が6割強である。以上の4点を踏まえた上で、特に須恵器坏と甲斐型坏について検討してみたい。

①須恵器坏

宮ヶ瀬遺跡群における須恵器坏は9世紀代に重量5割弱、10世紀代に重量7割弱を占め、相模国域の遺跡にしては多い割合である。この時期は相模型坏が主体を占める時期に当たっており、相模原市の遺跡を除く相模国域の集落では相模型坏が国府域においても主流であった。9世紀第2四半世紀から南多摩窯跡群の生産が軌道に乗ると、相模国域でも須恵器坏の需要が増えたが、相模原市の遺跡以外は須恵器が主流になるまで搬入されなかった。

相模国域における須恵器坏の割合は各地域によって異なることが報告書等で指摘してきた。須恵器坏の割合が多い遺跡としては相模原市周辺があげられ、橋本遺跡や矢掛・久保遺跡で見られる。橋本遺跡は相模国と武藏国の国境付近に位置し、南多摩窯跡群から至近距離にある。同遺跡の堅穴住居址から出土した須恵器坏の割合は、坏の総点数に対して9世紀代に8割、10世紀代に9割を示し、坏の総重量比で9世紀代に9割弱、10世紀代に9割強と須恵器が圧倒的な割合を占める(土井1986)。また、橋本遺跡に近接する矢掛・久保遺跡では10世紀前半期に須恵器がほとんどを占めることが報告されている(柳谷 博1989)。相模原市は南多摩窯跡群に隣接しているという地理的条件によって須恵器を多量に搬入できたと考えられ、坏に関する限り土師器よりも須恵器が多い割合を示している。

逆に須恵器坏の割合が少ない例としては、秦野市の西大竹尾尻遺跡群や草山遺跡、平塚市の向原遺跡の相模国西部内陸部をあげることができる。西大竹尾尻遺跡群では9・10世紀代の土師器坏：須恵器坏の割合が10：1であると報告されており、草山遺跡でも須恵器坏が少なく相模型坏が圧倒的な割合を占めることが報告されている。また、向原遺跡では、搬入土器の須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・他国土師器は全坏量の約18%にすぎないことが報告されており、その中に含まれる須恵器の割合は少ないことがわかる。

須恵器と土師器との割合が半数ずつを示す例としては一時期的な現象であるが、綾瀬市宮久保遺跡があげられる。同遺跡では8～9世紀前半までは相模型坏が9割以上を占めて主流であったが、宮久保Ⅷ期(9世紀第3四半期)頃は須恵器坏と土師器坏の個体数量がほぼ同じ割合になって、それ以降須恵器は1割前後で推移して減少する傾向が見られた(長谷川1990)と報告されている。

宮ヶ瀬遺跡群の土器組成は、搬入土器が6割強あり、その搬入品の中でも須恵器が坏全体の5割の割合を示している。こうした傾向は相模原市にある須恵器の割合が多い遺跡と近い傾向を示していると考えられる。

②甲斐型坏

搬入土器の坏において、甲斐型土器は相模国域では少なからず出土していることが多くの遺跡から知ることができる。甲斐型坏を出土した遺跡を地域別に表したのが第3表であるが、国府域の平塚市が圧倒的な出土例を誇っており、それに付随して相模湾沿岸部に出土例を見ることができる。こうした状況について、田尾誠敏は甲斐型坏の出土分布から相模湾沿岸や相模川・花水川流域等の河川流域に集中していたため、東海道の陸路よりはむしろ河川及び海路の流通経路を想定した(田尾1995・1997)。1992年の田尾誠敏による甲斐

型土器の出土遺跡一覧から10年経過し、出土例が増加して秦野市・伊勢原市・清川村において甲斐型壺が出土する遺跡が増加した。この状況からすると駿東からの海路や相模国内での河川経路のみで考えることには限界が見られるのではなかろうか。後述するように少なくとも甲斐型壺については、遺跡分布の上で陸路を想定しなければならない状況が見ることができる。宮ヶ瀬遺跡群の甲斐型壺は壺の中で9世紀代に1割程度の比率で使われており、相模国域の遺跡にしては出土比率が多く、図示された遺物についても40例ある。ただし、細かく見ると9世紀前半から中葉までが多く、それ以後は減少している。

壺類の分類比率について

壺類の分類に基づく特色として次の点があげられる。1) 地元産と考えられる相模型が主体である。2)

第3表 甲斐型土器出土遺跡一覧

市町村	遺跡名	壺	蓋	皿	大甕	小甕	鉢	羽釜	市町村	遺跡名	壺	蓋	皿	大甕	小甕	鉢	羽釜	
小田原市	三ツ俣遺跡(祭)	35							伊勢原市	原之宿遺跡	2							
	国府津・三ツ俣遺跡	4								上柏屋・三本松遺跡	1							
	矢代遺跡	1								亥止橋遺跡	1							
	千代光海端遺跡							1		池端地区遺跡群	4							
	水塚北側遺跡	9								鳴瀬第一地区遺跡群高森地区	18							
	水塚下り畑遺跡	23								鹿尾遺跡	13			1	1	1		
	千代南原遺跡第Ⅲ地点	2								恩名冲原遺跡	5							
	高田北之前遺跡第Ⅲ地点	1								及川宮ノ西遺跡	3							
	下曾我遺跡	8								及川天台遺跡	1							
二宮町	天神谷戸遺跡	22								愛甲堂山遺跡	4							
大磯町	馬場台遺跡		1							愛甲宮前遺跡	4							
	坊地遺跡	1								下花野山中遺跡	1							
	南飯宿遺跡	*								曾野N.1遺跡	1							
平塚市	四ノ宮高林寺遺跡	31								上浜田遺跡	5							
	四ノ宮山王A遺跡	15		3						本郷遺跡	20							
	四ノ宮山王B遺跡	9								本郷中谷津池端遺跡	1							
	四ノ宮斎訪前遺跡	5								大谷向原遺跡	7							
	四ノ宮斎訪前A遺跡	21		1						大谷真鶴遺跡	1							
	四ノ宮斎訪前B遺跡	6								国分尼寺北方遺跡	46							
	四ノ宮斎訪前C遺跡	10								陵瀬市	宮久保遺跡	1						
	四ノ宮天神前遺跡	102								早川城山地区遺跡群	3							
	四ノ宮下郷遺跡	17								No.27遺跡	*							
	神明久保遺跡	52		1						大和市	深見神社南遺跡	1						
	六ノ城遺跡	17								当麻遺跡	1							
	十七ノ城遺跡	1								相模原市	田名縮荷山遺跡	1		1				
	杉崎屋敷・四ノ城遺跡隣接地	*								失掛・久保遺跡	2							
	中原上宿遺跡	42								田名塙田遺跡群	9							
	坪ノ内遺跡	6		1						藤野町	蛭巻遺跡	1		12	3	3		
	樋谷原B遺跡	2								藤原大割目遺跡			2					
	中里B遺跡	3								大日原野原(カサガ)遺跡			3					
	王子ノ台遺跡	6		2						下小畠遺跡	*							
	向原遺跡	12		1						門戸中原遺跡	*							
	春日原遺跡	*								車久井町	青根馬渡遺跡	4		6				
	真田北金日遺跡	62								三ヶ木遺跡	2		2					
	厚木酒遺跡	18		10						青根引山遺跡			1					
	七ノ城遺跡	3								吉根中学校地内遺跡			1					
	達上ヶ丘遺跡	2								太井己遺跡	2							
	稻荷前A遺跡	5								城山町	川尻中村遺跡	1						
	稻荷前B遺跡	2								川尻遺跡	1							
	大川原遺跡	1								愛川町	牛原向原遺跡	3						
	林B遺跡	1								半原届中原遺跡	1							
	東中原遺跡	1								清川村	北原(No.11)遺跡	3						
	構之内遺跡	42	2							馬場(No.6)遺跡	5							
秦野市	草山遺跡	35		2						馬場(No.3)遺跡	1							
	草山No.24遺跡	12								馬場(No.6)遺跡(2)	2							
	太岳院遺跡	*								南(No.2)遺跡	7	1	1					
	尾尻八幡山遺跡	1								北原(No.10)遺跡	4		3					
	尾尻八幡油社前遺跡	7		1						表の屋敷(No.8)遺跡	7		4					
	根丸島遺跡	*								北原(No.10-11)遺跡	2							
	鳥啼遺跡	1		1						藤沢市	南根治山遺跡	2						
	下大根峯遺跡	12		2						茅ヶ崎市	西久保上ノ町・広町遺跡	11	3					
	西大竹尾尻遺跡	10								下町屋石原B遺跡	5							
	鉢ノ木遺跡	4								上ノ町遺跡	2							
	東大竹遺跡	3	2							下寺尾東方遺跡	1							
	沼目清水谷遺跡	*								鎌倉市	由比・浜中世樂園墓地遺跡	35						
	沼目天王原遺跡	2								長谷小路南遺跡	2							
	坪ノ内久門寺遺跡	*								逗子市	池子遺跡群	32						
	石田源太夫遺跡	*								音ヶ谷台地遺跡	1							
	串橋登り道遺跡	*								横須賀市	長井町内原遺跡	4						
	板戸八雲殿遺跡	*								大町谷東遺跡	2							
	神戸・上宿遺跡	10								夢原遺跡	*							
	坪ノ内宮ノ前遺跡	8								合計	1090点	1010	8	20	38	9	4	1
	東富岡北三間遺跡	4								器種組成率	92.7%	0.7%	1.8%	3.5%	0.8%	0.4%	0.1%	
	上柏屋遺跡	2																

*環の欄に*印のある遺跡は田尾誠敏1992年論文によったが文献で数値を確認できなかった遺跡である。

搬入土器は武藏型、甲斐型、須恵器であるが、重量で見ると1割強となる。3)甲斐型甕が図示報告8点、破片資料を含めると、総点数39点、総重量524g、個体総数9個体あり、他地域に比べ比較的多く出土している。以上の3点を踏まえて搬入土器である武藏型甕・須恵器甕及び甲斐型甕について検討してみたい。

①武藏型甕・須恵器甕

搬入品である武藏型甕及び須恵器甕は、相模国域の遺跡ではある程度の割合で出土する土器である。武藏型甕は破片数や重量で見ると3~5%程度であるが、個体数で見ると9世紀代に2割弱、10世紀代に2割強を示しているが、実の総重量において9世紀代に4558gより10世紀代に1916gと大幅に減少している。これは、武藏型甕のうち台付小形甕が比較的多く出土しているために起こった差違と考えられる。宮ヶ瀬遺跡群では相模型甕が主体的な煮炊具として位置づけられ、武藏型甕は補完的に使用されたものであり、相模国域集落とほぼ同じ傾向にあるといえる。

須恵器甕は9世紀・10世紀代ともに1割以下を示し少ない割合を示している。須恵器甕は大甕の貯蔵具であり1個体の重量は土師器甕に比して数倍もの差があることを勘案すると少量の使用であったと考えられる。須恵器甕は住居の片隅に置かれた水甕であり、壊れる確率が少ないとや住居址に一つ存在すれば充分な容器であるため、搬入品としては数量的に少なかったと考えられる。

②甲斐型甕

甲斐型甕は破片点数、重量、個体数のいずれをとっても9世紀代で3~5%程度であり、10世紀代でも1%以下の比率で少ない傾向にある。また、その具体的な数値は破片点数で39点、重量で524g、個体数で9個体ある。清川村宮ヶ瀬において甲斐型甕が出土するという点は注目に値する。甲斐型土器の器種としては壺が主体を占めている点については田尾誠敏の見解通りである(田尾1995)が、微少ながらも甲斐型甕が出土することは煮炊具としての甕という器種の特性から流通経路の再検討が必要になると思われる。

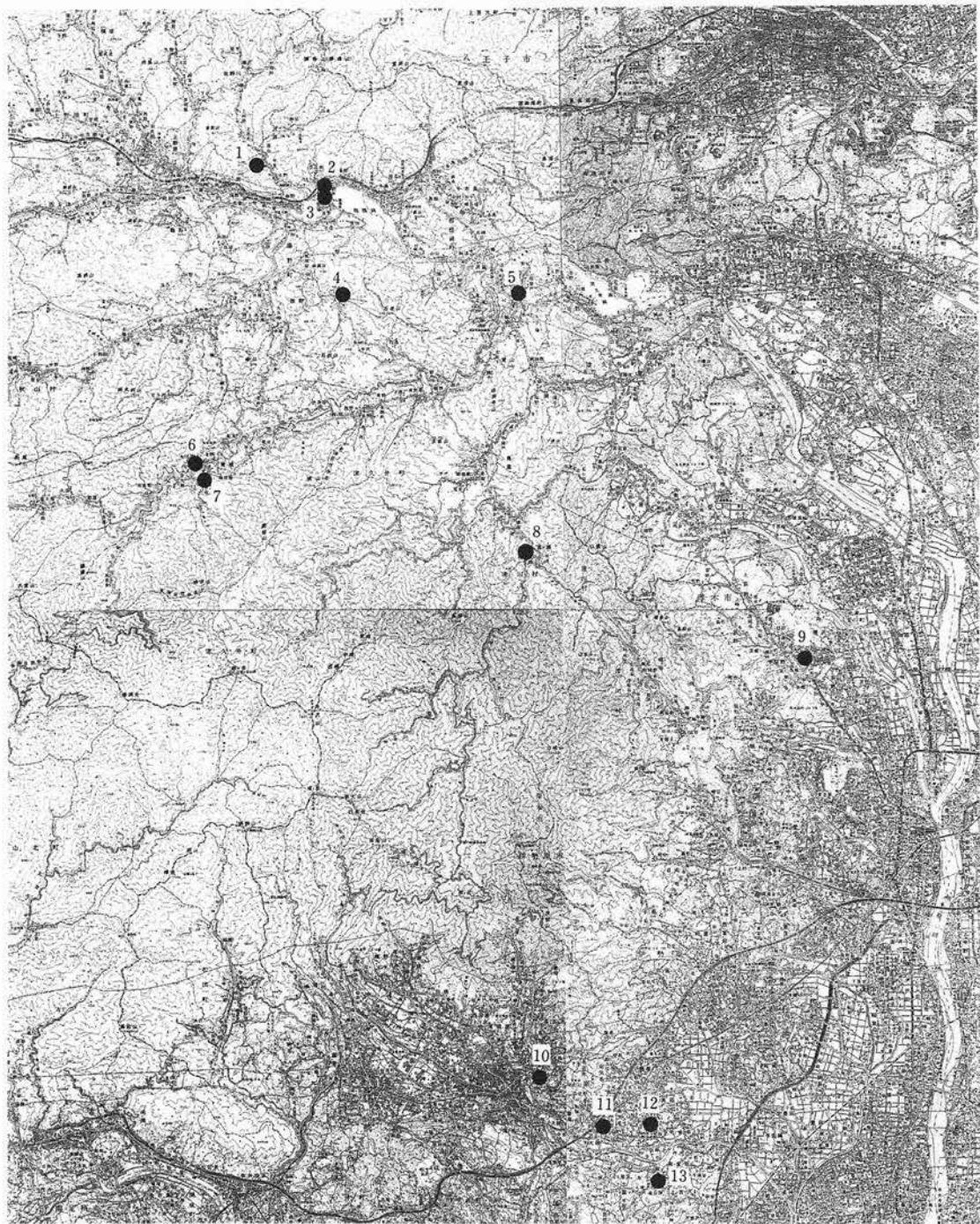
相模国域で甲斐型甕が報告されている遺跡を第3表に示したが、その分布をみると藤野町、津久井町、厚木市、伊勢原市、秦野市となり、そして清川村宮ヶ瀬になる(第1図)。第1図から道志川流域、桂川から相模川上流に至る流域、そしてかなり南に離れて草山遺跡、下大槻峯遺跡、王子ノ台遺跡、向原遺跡の4遺跡が近距離でかたまっている。宮ヶ瀬遺跡群では、南(No2)遺跡で1点、北原(No10)遺跡で3点、表の屋敷(No8)で4点の計8点が報告されている(第2図)。相模湾沿岸部で甲斐型甕を出土している遺跡は小田原市国府津三ツ俣遺跡の1点を見るのみである。田尾誠敏は灰釉陶器を含めて甲斐型壺の搬入経路は海路であるとし、甕については言及していないものの基本的には海路を甲斐型土器の搬入経路と考えているようである(田尾1995、1997)。しかし、道志川を含めた相模川上流域や宮ヶ瀬地区の甲斐型甕の出土例は相模川を遡ってきたと考えるよりは甲斐国から下る陸路ないしは河川路を想定した方が自然であると考える。現在のところ、甲斐型甕の出土する遺跡は相模の山間部及び丹沢山塊縁辺の一地域であり、国府域を流通拠点とするならば、国府域に甲斐型甕が出土しないことは不可解といわざるを得ない。この状況を捉え直すと甲斐国から相模国への道を考えた方が穩当であると考えられる。

道として考えられるのは、甲斐国から都留市と大月市を抜ける桂川沿いの道や籠坂峠を越えて須走を通り東海道へ出る道などが考えられよう。この2ルートのうち桂川沿いの道が甲斐型土器の出土状況から理解でき、相模型壺・甕や武藏型壺・甕等の甲斐国域の郡内地区における都留市や大月市等の遺跡の検討から甲斐型土器の流通経路として捉え直す必要があろう。

また、平安時代前半には富士山の火山爆発があって道が寸断された時期がある。日本紀略の延暦21(802)

年5月19日の記事によると富士山の噴火によって足柄路を廃して、菅原(箱根)途を開くとある。8~9世紀にかけて富士山の火山活動は激しく、火山灰や溶岩流などによる被害が多くの記録に見られる。考古学的な調査においてもこの頃の富士山の火山灰は把握されており、こうした自然災害によって、交通ルートが変更されたことも考慮していかなければならない。ただ、先の足柄路は翌延暦22(803)年に復旧している。

ところで、藤野町周辺について国境問題がある。甲斐国と相模国が接する「国堺」に関して争い、中央政



- 1. 大日野原(ケサイコ)遺跡
- 2. 嵯峨遺跡
- 3. 檜戸中原遺跡
- 4. 篠原大割目遺跡
- 5. 三ヶ木遺跡
- 6. 青根馬渡・引山遺跡
- 7. 青根中学校地内遺跡
- 8. 宮ヶ瀬遺跡群
- 9. 鳥尾遺跡
- 10. 草山遺跡
- 11. 下大根峯遺跡
- 12. 王子ノ台遺跡
- 13. 向原遺跡

第1図 甲斐型甕出土遺跡位置図

府から「使いを遣わして甲斐国都留郡□留村東辺砥沢を定め、両国堺となす。(日本後紀延暦16(797)年3月2日)」とあり、「砥沢」より東を相模、西を甲斐とした。この件については河野喜映の論考があるが、「砥沢」がどこに比定されるかが問題となり、神奈川県藤野町の「名倉沢」(磯貝2001) や「底沢」(河野2000) 等が比定されている。仮に藤野町が甲斐国域であるならば、藤野町に点在する遺跡の甲斐型甕は地元生産の產物であると考えられるが、山間部の他遺跡はやはり陸路を想定する必要があろう。

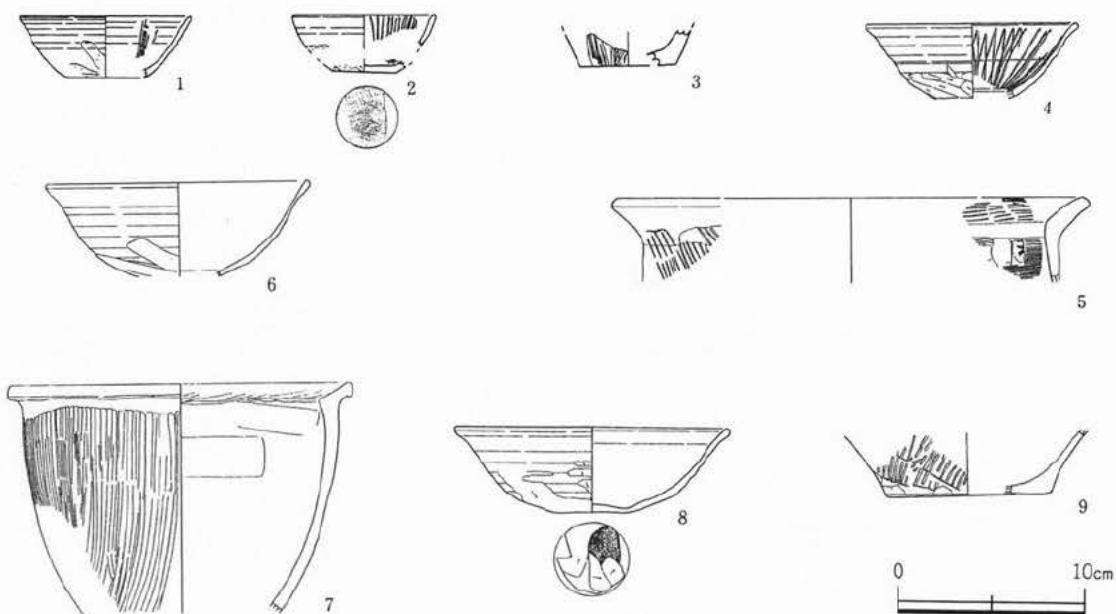
まとめ

宮ヶ瀬遺跡群の土器組成からその特色を検討し、近隣遺跡との比較を試みた。この小稿で甲斐型甕の搬入経路について一つの提言を試みることができた。今まで甲斐型土器の搬入ルートとして海路・河川のルートが基本的な見解であったが、甲斐型甕の出土遺跡についてその分布を見ると山間部と草山・下大槻峠・王子ノ台・向原各遺跡のまとまった分布が見られ、甲斐国からの陸路を推測した。今後、資料的な蓄積を積み上げて更なる検討を加えていきたい。最後に、この小稿に対し富永樹之、河野喜映の各氏をはじめ、多くの方々にご教示をいただいた。お礼申し上げる。

(木村 尚二)

引用・参考文献

- | | | |
|-------|---------|--|
| 磯貝正義 | 2001.2 | 「総説」「山梨県史資料編3」 |
| 市川正史 | 1983.3 | 「出土土器について」「向原遺跡(第6分冊)」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 |
| 河野喜映 | 2000.3 | 「甲相の国境争い—砥沢の位置についてー」「ふるさと津久井』第1号 |
| 斎藤孝正 | 1984.3 | 「須恵器」「四ノ宮下郷I」 |
| 霜出俊浩 | 2003.1 | 「出土した土器の様相」「西大竹尾尻遺跡群1」 |
| 田尾誠敏 | 1995.2 | 「相模地方の甲斐型土器観書II」「東海大学校地内遺跡調査団報告」5 |
| | 1997.3 | 「相模湾沿岸部出土の甲斐型土器素描」「上ノ町・広町遺跡」 |
| | 1992.5 | 「相模地方の甲斐型土器観書」山梨縣考古學協會誌第5号 |
| 土井永好 | 1986.9 | 「遺構と遺物」「橋本遺跡(歴史時代)」 |
| 長谷川 厚 | 1990.3 | 「出土土器の編年と組成」「宮久保遺跡III」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 |
| | 1990.12 | 「土器について」「草山遺跡III」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18 |
| 柳谷 博 | 1989.3 | 「まとめ」「矢掛・久保遺跡」矢掛・久保遺跡調査会 |



1～3 北原(No.10)遺跡 H6号住居址 4～5 表の屋敷(No.8)遺跡 H9号住居址

6～7 南(No.2)遺跡 H2号住居址 8～9 表の屋敷(No.8)遺跡 H3号住居址

第2図 宮ヶ瀬遺跡群出土の甲斐型甕及び伴出甲斐型壺

甲斐型土器出土報告書名

市川正史	1986. 9	『三ツ俣遺跡』	谷口 肇	2000. 3	『三ツ俣遺跡II』
富永樹之	2000. 3	『三ツ俣遺跡III』	田尾誠敏	1991. 9	『国府津三ツ俣遺跡』
柏木義治	2000.10	『矢代遺跡』	杉山博久	1984. 4	『千代光海端遺跡』
大島慎一	1986. 3	『永塚北畠遺跡』	杉山博久	1989. 3	『永塚下り畠遺跡』調査報告書III
田尾誠敏	2002. 3	『千代南原遺跡第VII地点』	田尾誠敏	2001. 3	『高田北之前遺跡第II地点』
中田 英	1090. 3	『天神谷戸遺跡』	鈴木一男	1983. 3	『馬場台遺跡』
小島弘義	1985. 3	『四ノ宮高林寺II』	小島弘義	1986. 3	『四ノ宮高林寺III』
上原正人	1993. 3	『山王A遺跡第2・3地点』	押木弘巳	2003. 3	『山王A-第5地点-』
若林勝司	1993. 3	『山王B遺跡・稻荷前A遺跡他』	杉山博久	1980. 3	『諏訪前遺跡』
小島弘義	1987. 3	『四ノ宮諏訪前A遺跡』	小島弘義	1989. 3	『諏訪前A遺跡第2地区』
大野 悟	1982. 3	『諏訪前B遺跡・六ノ域』	林原利明	1997	『諏訪前C遺跡』
小島弘義	1988. 3	『四ノ宮天神前遺跡』	上原正人	1996. 3	『天神前遺跡-第8地区-』
小島弘義	1988. 3	『諏訪前B・高林寺』	小島弘義	1989. 3	『諏訪前B・大繩橋遺跡他』
若林勝司	1991. 3	『諏訪前A・十七ノ域遺跡他』	明石 新	1991. 3	『神明久保遺跡第一地区』
明石 新	1995. 3	『山王B・大会原遺跡他』	菅沼圭介	1996. 3	『林B遺跡他』
若林勝司	1997. 3	『稻荷前A遺跡他』	大野 悟	2001. 3	『山王B遺跡』
大野 悟	2002. 3	『厚木道遺跡』	菅沼圭介	2003. 3	『神明久保遺跡第8地点』
相原敏夫	1998. 3	『諏訪町A遺跡』	小島弘義	1984. 3	『四ノ宮下郷遺跡』
小島弘義	1980. 3	『四ノ宮下ノ郷遺跡概報』	小島弘義	1981. 3	『四ノ宮上郷下郷遺跡概報』
近野正幸	2001. 3	『神明久保遺跡』	小島弘義	1986. 3	『真土六の域遺跡』
小島弘義	1987. 3	『真土六の域遺跡II』	明石 新	1981. 3	『中原上宿遺跡』
平塚市教育委員会	1990	『梶谷原・高林寺遺跡他』	小島弘義	1988. 3	『中里B遺跡』
田尾誠敏	1999. 3	『王子ノ台遺跡II歴史時代編』	市川正史	1982. 6	『向原遺跡』
若林勝司	1999. 3 ~ 2003	『真田北金目遺跡1・2・3』若林勝司		1994. 3	『厚木道遺跡第3地点』
河合英夫	2003. 3	『平塚市真田北金目遺跡4』	栗山雄輝	1998. 3	『七ノ域遺跡第2地点』
河合英夫他	1994. 6	『構之内遺跡』	大野 悟	2000. 3	『構之内遺跡』
大上周三他	1989.11	『草山遺跡II』	山上英賛	1989	『草山No24遺跡』
安藤文一	1983.11	『草山遺跡-No24地点の調査』	杉山博久	1976. 5	『尾尻八幡山遺跡』
大多和隆志	1983. 3	『尾尻八幡神社前遺跡』	伊東秀吉	1976	『根丸島遺跡概報I・II』
大上周三	1997. 3	『下大槻峯遺跡』	大上周三	1998. 3	『下大槻峯遺跡II・III』
大塚健一	1999. 3	『鉢ノ木遺跡(No27)』	河合英夫	1990	『東大竹遺跡群』
柏木義治	1999. 3	『神戸・上宿遺跡(No15)』	官坂淳一	2003. 3	『坪ノ内宮ノ前遺跡』
宮坂淳一	1998. 3	『東富岡北三間上・柏屋川上遺跡』	高橋勝広	1996. 3	『原之宿遺跡』
高杉博章	1997. 3	『上柏屋・三本松遺跡』	高杉博章	1998. 3	『咳止橋遺跡』
高橋勝広	2000. 3	『池端地区遺跡群』	河合英夫	1999. 3	『成瀬第二地区遺跡群高森地区』
國平健三他	1975. 3	『鳴尾遺跡』	迫 和幸	2000. 2	『恩名冲原遺跡』
香村紘一	1996. 7	『及川宮ノ西遺跡』	香村紘一	1997. 3	『及川天台遺跡』
迫 和幸	2001. 2	『愛甲堂山遺跡』	林原利明	1994. 3	『愛甲宮前遺跡』
香村紘一	1998. 3	『下荻野山中遺跡』	松山敬一朗	1999. 7	『曾野No1遺跡』
長谷川厚	1979. 3	『上浜田遺跡』	小出義治他	1985~2000	『本郷遺跡I~XVII』
菊川英政	1998	『本郷中谷津池端遺跡』	土井義行	1992. 3	『大谷向原遺跡』
高杉博章	1992.10	『大谷真鰐遺跡』	高杉博章	1998. 3	『国分尼寺北方遺跡第16次調査』
國平健三他	1987. 3	『宮久保遺跡I・II・III』	吳地英夫	2000. 3	『早川城山地区遺跡群』
小池 聰	1991	『深見神社南遺跡』	上田 薫	1977. 3	『当麻遺跡』
河野喜映	1986. 7	『田名稻荷山遺跡』	迫 和幸	1999. 3	『田名塩田遺跡群I・II・III』
林原利明	1987. 3	『藤野町嵯峨遺跡』	篠原大割目遺跡調査団	1989	『篠原大割目遺跡の調査』
大日野原遺跡調査団	1988	『大日野原遺跡の調査』	池田 治	1999. 3	『道志導水路閑連遺跡』
北平朗久	1999. 3	『県営三ヶ木団地内遺跡』	吳地英夫	1991. 3	『青根中学校地内遺跡』
北平朗久	1995. 5	『太井己遺跡』	池田 治	2002. 3	『川尻中村遺跡』
河野喜映	1992. 3	『川尻遺跡』	新開基史	2000. 3	『半原屈中原遺跡』
望月 芳	1998. 3	『南鍛冶山遺跡古代1・2』	宮下秀之	2000.11	『西久保・広町遺跡』
村上吉正	2003. 2	『上ノ町遺跡』	大村浩司	1995. 3	『下寺尾東方A遺跡』
大河内 勉	1996.11	『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡』	菊川英政	1992. 2	『長谷小路南遺跡』
かながわ考古学財団	1994. 1 ~ 1999	『池子遺跡群I~X』中三川 昇	2000. 3	『長井町内原遺跡』	
中三川 昇	1998. 3	『大町谷東遺跡』	服部敬史	1995. 3	『藤野町史』
田尾誠敏	2002. 9	『下曾我遺跡・永塚下り畠遺跡第IV地点』			
宮ヶ瀬遺跡群報告書(かながわ考古学財団調査報告)		は次通り			
	1994	『宮ヶ瀬遺跡群IV北原(No11)遺跡』	1995	『宮ヶ瀬遺跡群・馬場(No6)遺跡』	
	1996	『宮ヶ瀬遺跡群VII馬場(No3)遺跡』	1995	『宮ヶ瀬遺跡群XVII馬場(No6)遺跡(2)』	
	1996	『宮ヶ瀬遺跡群VII南(No2)遺跡』	1997	『宮ヶ瀬遺跡群ウ北原(No10)遺跡』	
	1997	『宮ヶ瀬遺跡群XIII表の屋敷(No8)遺跡』	1998	『宮ヶ瀬遺跡群X・北原(No10・11北)遺跡』	
	1999	『宮ヶ瀬遺跡群XVII半原向原遺跡(2)』			

(b) 出土土器・陶器の時期区分と様相

はじめに

宮ヶ瀬遺跡群の各遺跡で出土した奈良・平安時代の土器・陶器の年代は報告書に示されているが、遺跡群の全体を対象とした視点からの検討はされていない。奈良・平安時代の研究プロジェクトチームでは平成16年度に宮ヶ瀬遺跡群の集落の検討を行う予定であるが、そのために出土した土器・陶器を区分してその様相と年代をまず明らかにすることが必要となる。

検討は基本的に遺構内出土のものを対象とし、遺物数が少ない時期は遺構外から出土したものも対象とした。これらの出土品について遺構内での出土状況を検討し、各遺構に確実に伴うと判断された遺物群は同時存在とした。次いで、出土数が比較的多い土師器と須恵器の供膳形態である壺・碗等を利用して、遺物群の前後関係や時期・時代を検討した。この際に今までの研究⁽¹⁾や遺構の重複による新旧関係を参考にした⁽²⁾。また、宮ヶ瀬遺跡群の報告書では多くの場合、遺構内出土遺物の出土位置が点で平面図中に表示され、断面図中の点と会わせることによって三次元的な出土位置を復元できるようになっている。これを利用して重複竪穴のそれぞれに所属する遺物を確定できた例もある⁽³⁾。前後関係・時期等が決まってから、同時存在の他の器種を付加して時期別の土器の集成図を作成した⁽⁴⁾。なお、各時期にあてはめられない遺物で宮ヶ瀬遺跡群を考えるのに必要と思われるものを各図の最後にまとめた。

時期区分と各期の様相

I期（第3図）

古墳時代の伝統を受け継いだ土師器と東海地方産の須恵器からなる時期。宮ヶ瀬遺跡群では土師器だけが出土した。相模川下流域の同時期の遺跡では東海地方産の須恵器の碗等が共伴することが多い。

時期は7世紀末から8世紀第1四半期。図示した遺物は竪穴住居2棟と遺構外から出土したものである。

土師器壺と土師器甕からなる。1・2は壺で、外面の口縁部と底部の境には稜がある。3・4は長胴甕、5は胴張甕。甕の外面は全てヘラケズリ調整されている。

II期（第3図）

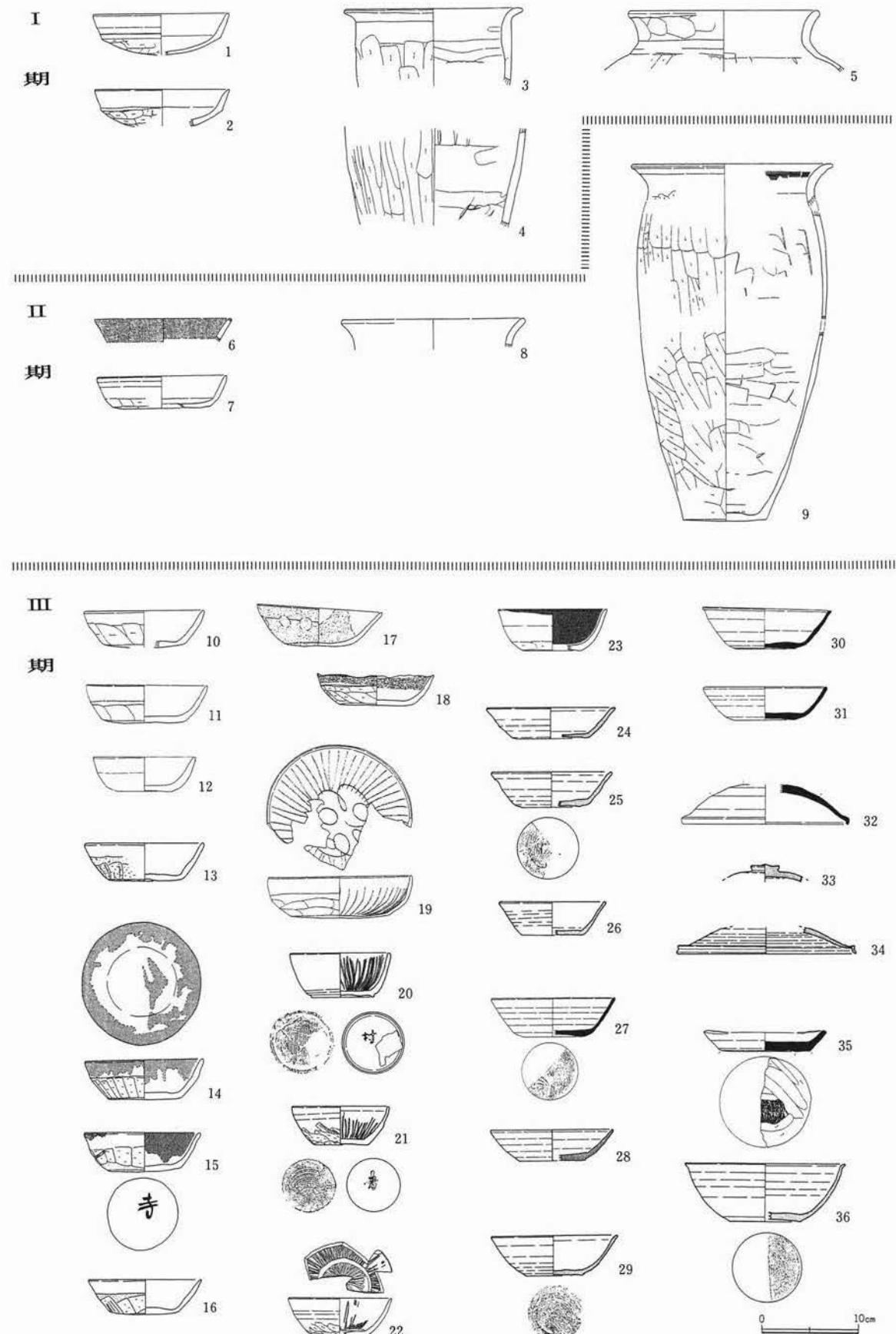
奈良・平安時代の相模国に広く分布する相模型壺が成立する時期で、宮ヶ瀬遺跡群の周辺では土師器甕には古墳時代の伝統を引いたものが多くみられる。I期と同じく東海地方産の須恵器碗などが搬入されることが多い。宮ヶ瀬遺跡群では土師器だけが出土した。

時期は8世紀第2四半期前半で、図に用いた遺物は全て遺構外から出土したものである。

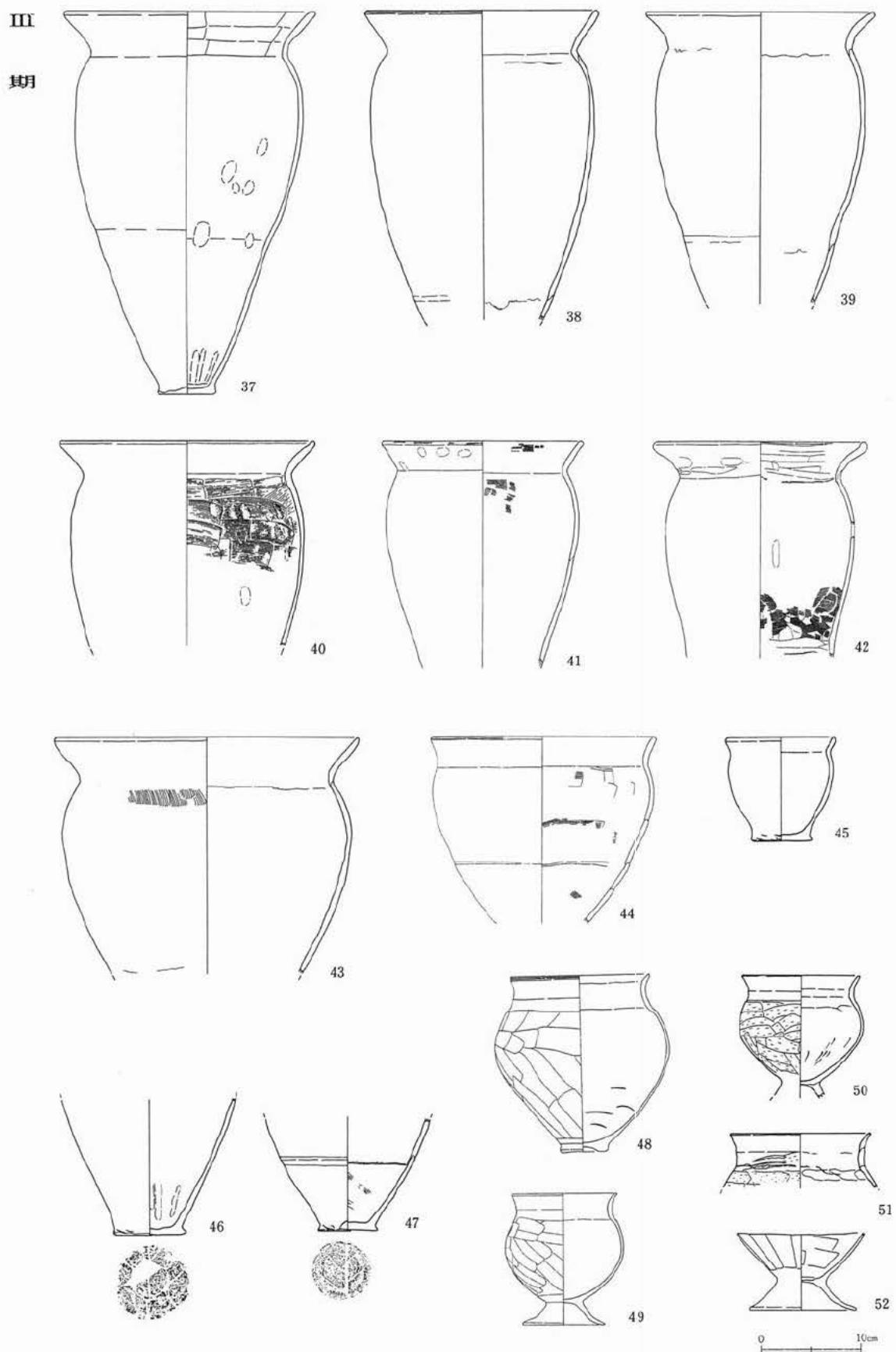
土師器壺と土師器甕からなる。6は内外両面が赤彩された盤状壺で、高座郡北部から武藏国多摩郡中西部に多くみられる。7は相模型壺で、体部の下端がヘラケズリされた平底のもの。法量は推定復元。8は甕の口縁部端部、9は土師器長胴甕で、外面に縦方向にヘラケズリ調整されている。

III期（第3・4図）

相模川流域一帯では相模型壺と甕が主体となり、多摩丘陵に近い高座郡北部や愛甲郡では南多摩窯跡群御殿山窯で生産された須恵器壺が多く伴う時期。宮ヶ瀬遺跡群ではこの時期に各地から搬入された土器・陶器が目立ち、武藏南部や甲斐からは土師器壺が、武藏北部からは須恵器壺・碗・蓋等が搬入されている。土師器甕は主体の相模型の他に武藏型甕もみられる。相模型壺は口径12cm前後、底径はその1/2以上の箱型のものである。須恵器壺は底部外面をヘラケズリ調整するものではなく、全て回転糸切り痕が残っている。須恵器碗の底部外面はヘラケズリ調整されている。



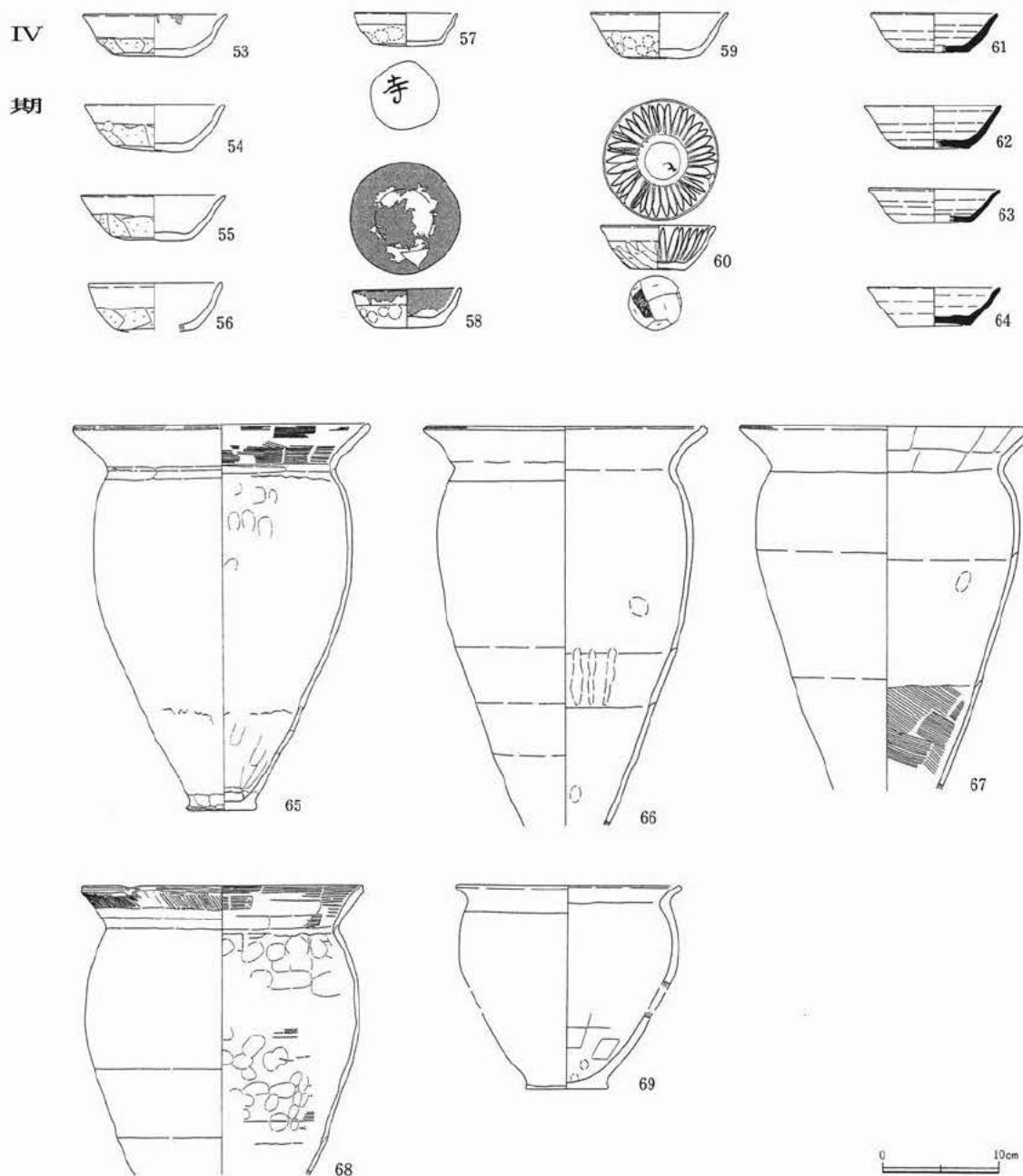
第3図 出土土器・陶器 (I ~ III期) [S = 1/6]



第4図 出土土器・陶器（III期）[S=1/6]

時期は9世紀初頭～同第2四半期前半頃と判断され、図に用いた遺物は堅穴住居9棟と土坑1基から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG37号窯式のものにあたる。

10～23・37～52は土師器、24～36は須恵器。10～16は相模型坏で、10～12は胎土が軟質、13～16は硬質である。11は内外両面が赤彩され、14・15・17・18の内外には油煙が付着している。15の底部外面には「寺」が墨書されている。17は南武藏型坏で、18は製作技術が17と同じだが胎土に砂が多く混じり産地が異なる。19は北武藏型坏で内面に暗文がみられる。20～22は甲斐型坏で、20の体部外面には横位のヘラミガキが施され、底部外面中央には木製工具による静止ヘラケズリ痕が残り、削出高台の両側は回転ヘラケズリされている。20と21の見込部に暗文はみられない。また、底部外面には「村」「十万」がそれぞれ墨書されている。23は内黒土器。24～26・32・35は御殿山窯の製品で、27・28は胎土が精選され焼成のよいもので生産地は不



第5図 出土土器・陶器 [IV期] [S=1/6]

明。29~31・33・34・36は南比企窯の製品。24~31は壺で、底部外面にはヘラケズリは認められない。32~34は蓋、35・36は椀で、35の底部外面は外周が静止ヘラケズリされ、36は底部外面の全面が回転ヘラケズリされている。37~47は相模型甕、48~52は武藏型甕。37~42は長胴甕で、41・42は口径がやや小さい。43・44は胴張甕でやはり口径に大小がある。45は小形甕、46・47は相模型甕の底部で、径は6cm代。40・42のように相模型甕で内面にハケメを多く残すものは少ない。武藏型甕は「く」の字状の口縁部が主体だが一部には51のように「コ」の字状のものもみられる。35・52は破損した上端部を磨いて再利用されている。

IV期（第5図）

相模川流域の海岸部山寄りの遺跡では土師器や須恵器の様相はⅢ期と変わらないが、宮ヶ瀬遺跡群では搬入品に変化がみられる。南武藏や甲斐から土師器壺が搬入されるが、その数は減少する。須恵器は武藏北部の南比企窯産のものはみられなくなり、ほとんどが御殿山窯の製品となる。相模型壺は口縁部が外反するようになり、口径が11cm代と最も小形のものが現れる。土師器甕では相模型が主体となっているが、図示できなかったが武藏型甕もみられる。また、この時期に灰釉陶器が伴うようになったと思われる。

時期は9世紀第2四半期後半から同第3四半期にかけてで、図に用いた遺物は堅穴住居7棟と礎石建物1棟から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG37号窯式からG59号窯式のものにあたる。

53~57は相模型壺であり、57の体部外面にはヘラケズリがみられないが胎土は相模型と同一で製作技法を省略したものと思われる。底部外面には「寺」が墨書きされている。58・59は南武藏型壺で、58の内外両面には油煙が付着している。60は甲斐型の土師器壺で、61~64は須恵器壺である。65~69は相模型甕で、65~68は長胴甕、69は小形甕である。

V期（第6図）

相模川流域の平野部一帯の遺跡では相模型土師器壺や甕が主体を占めるが、宮ヶ瀬遺跡群では相模型土師器壺が極めて少なくなり、壺・椀といった供膳形態は御殿山窯産の須恵器が主体となる。土師器壺には甲斐から搬入されたものもあるが、数は多くない。土師器甕には相模型と共に武藏型もみられる。

時期は9世紀後半で、図の遺物は堅穴住居3棟から出土した。須恵器はG25号窯式を主体とする。

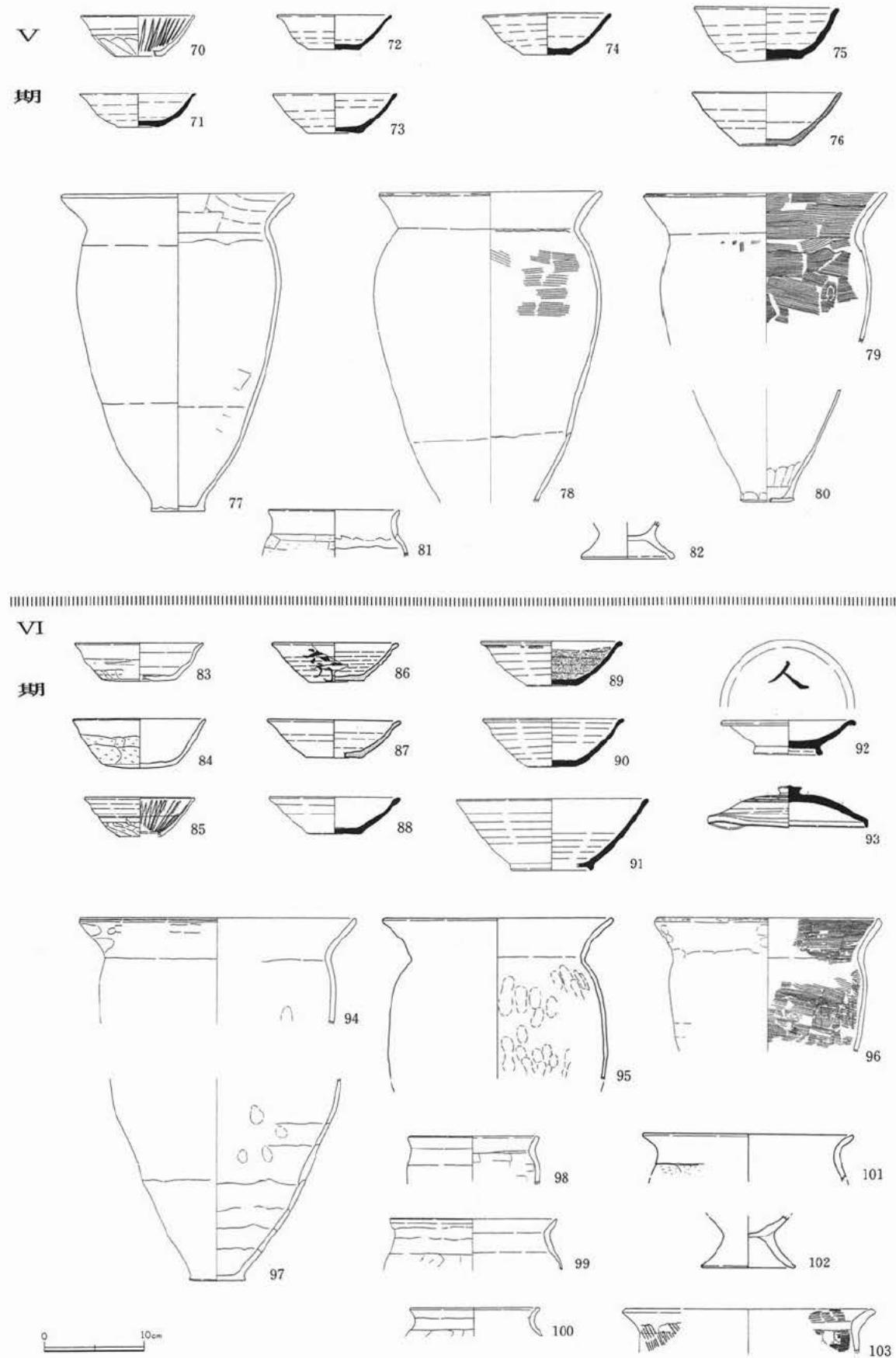
70は甲斐型の土師器壺。71~76は須恵器で、71~74は壺75~76は椀である。75はG59窯式で伝世品と思われる。77~80は相模型の長胴甕。80の底径は5.8cm。81・82は武藏型の台付甕。

VI期（第6図）

宮ヶ瀬遺跡群では前のV期と同じように壺・椀などの供膳形態の主体は須恵器が占め、煮沸形態の甕は土師器となっている。土師器壺は客体的に存在し、相模型・甲斐型の両方がみられる。須恵器は御殿山窯産のものが主体である。灰釉陶器は確実な共伴例はみられなかつたが、伴出すると思われる。土師器甕は相模型が主体となっていて次いで武藏型がみられる。また、甲斐型の甕もみられるが、数は多くない。

時期は9世紀末から10世紀第1四半期にあたり、図の遺物は堅穴住居4棟から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG5号窯式前半代にあたると思われる⁽⁵⁾。

83・84は相模型壺。85は甲斐型壺で、体部の外傾が強くなる。86~93は須恵器。86~90は壺で、口縁部が肥厚して外反する。89・90のように大振りの壺が現れる。86の外面には「六方」の墨書きがされている。89の内面には焼成時の降灰が顕著にみられる。91は高台付椀、92は高台付皿で共にⅦ期にもみられる器形である。92の内面には「人」が墨書きされている。93は蓋で、この時期にはほとんどみられなくなるので、伝世品の



第6図 出土土器・陶器 [V・VI期] [S=1/6]

可能性がある。94～98は相模型甕で94～97は長胴甕、98は小形甕である。96のように内面にハケメ痕を残すものは少ない。97の底径は5.8cmである。99・100は「コ」の字状の武藏型台付甕。101は製作技法が99と同じであるが胎土が異なり、生産地が異なっている可能性がある。102台付甕の台部で、胎土は101と同じである。103は甲斐型の甕の口縁部である。

VII期（第7図）

宮ヶ瀬遺跡群では前のVI期と同じく壺・椀などの供膳形態の主体は御殿山窯産の須恵器が占めているが、灰釉陶器の椀が確実に共伴するようになる。土師器の供膳形態では相模型壺・皿、そして甲斐型壺が少數ながらみられる。相模型壺は体部外面に手づくね痕を大きく残す最終段階のものが主体となる。煮沸形態の甕は土師器で、従来からのものと伴って武藏型甕の変質した厚手の甕がみられるようになる。甲斐型の甕もみられるが、数は少ない。この他に御殿山窯で生産された須恵器の壺や甕も伴う。

時期は、10世紀第2四半期から中葉にあたり、図の遺物は竪穴住居4棟から出土したものである。御殿山窯の須恵器はG5号窯式後半にあたると思われる⁽⁶⁾。

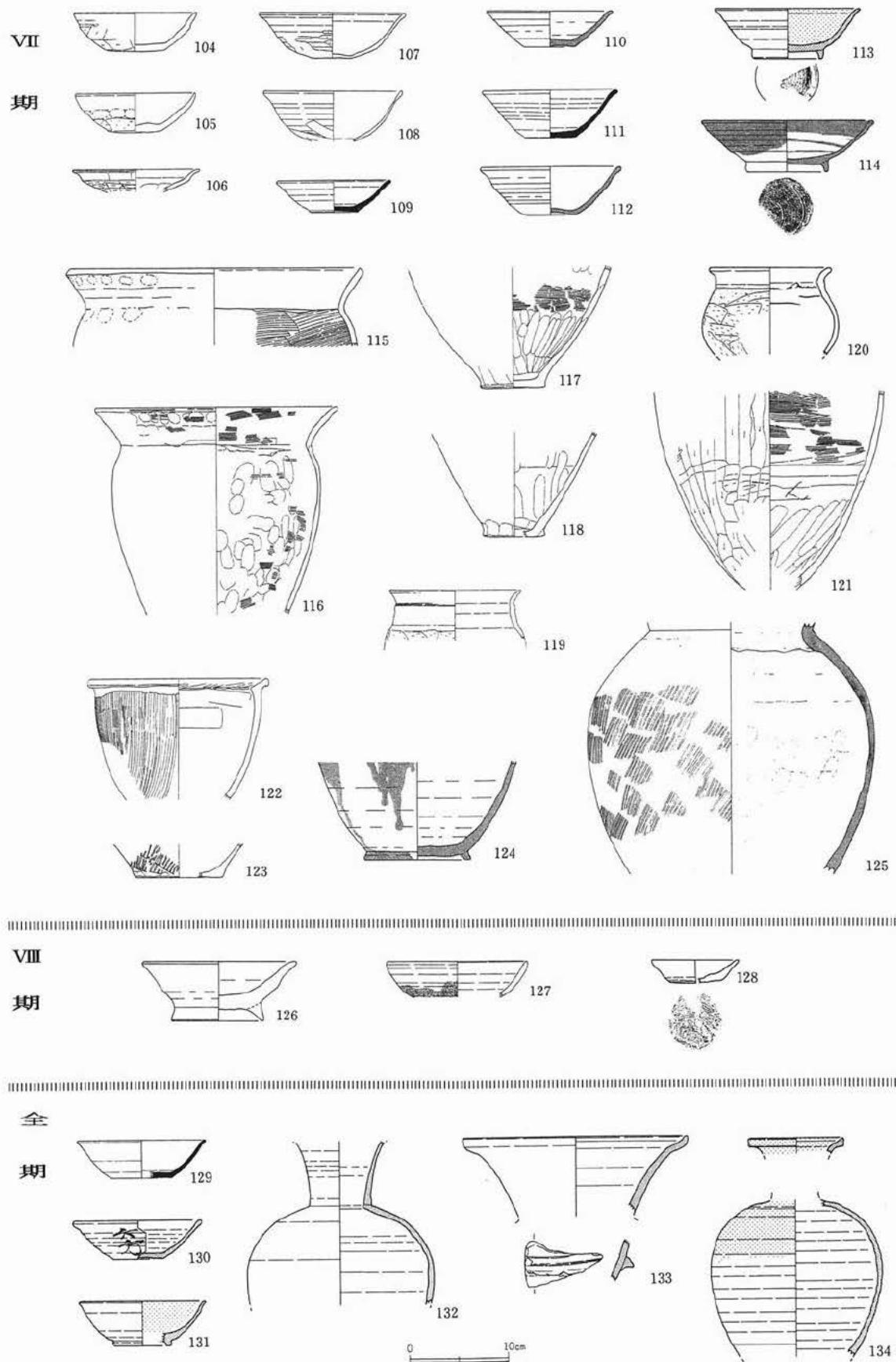
104・105は相模型壺で、底部が丸く小さくなる。体部外面にケズリ残しがみられるが製作技法の簡略化が目立つ。106は土師器皿である。107・108は甲斐型壺の系統の土師器壺で、体部内面に暗文が施されない。109～112は須恵器壺で111・112は大振りのものである。113・114は灰釉陶器椀で、113は黒笹90号窯式、114は折戸53号窯式である。113は伝世品と思われる。115から118は相模型甕で、115・117は胴張甕、116・118は長胴甕である。119・120は武藏型の台付甕で、120は「コ」の字状の口縁部が変形し、厚い胎土となっている。121は武藏型甕の影響下で多摩丘陵周辺でこの時期に製作されるようになった外面を縦方向にヘラケズリする厚手の土師器甕の胴部である。122・123は甲斐型の甕で、122は小形甕、124は底部である。124・125は須恵器で、124は長頸瓶の底部、125は甕の胴部で共に御殿山窯の製品である。

VIII期（第7図）

平安時代後半に比定されるロクロを用いて製作された土師器・土師質土器の時期をVIII期として便宜的にまとめた。実際には126・127・128の各土器の年代はズレていて各土器を別々の時期に分割することもできるが、資料が限られるので一つにまとめた。3点とも壁に付設されたカマドがある竪穴住居から出土している。126は三角形に張出す高台が付くロクロ土師器の高台付椀で、10世紀後半から11世紀前半代のものと思われる。127はロクロ土師器壺で、小破片からの復元実測である。128は土師質土器の小皿で、11世紀後半代を中心とした時期のもので、底部内面の中央が段をもって窪んでいる。

全期【特色ある陶器】（第7図）

竪穴住居址の覆土等から出土したもので細かな所属時期を決められなかった土器・陶器のうち、宮ヶ瀬遺跡群にとって意義が認められると考えられるものをまとめてみた。129・130・132・133は須恵器で、131・134は灰釉陶器椀である。129は宮ヶ瀬遺跡群では最も新しい南比企窯の製品で、V期に並行すると思われる。130・132は御殿山窯の製品である。130はG5窯式の壺で、VI期の86と同じく外面に「六方」と墨書されている。VI期かVII期に属するものである。131は黒笹14号窯式の椀で、宮ヶ瀬遺跡群で出土した最も古い灰釉陶器である。132は131と同じ住居址で出土した長頸瓶である。133は胴部上半の外面に突帯が付く壺で、四耳が付く可能性が高い。口唇部の外面の下端が曲線状に崩れた形をしている。軟質の焼成で、生産地は不明。134は長頸瓶で、VI期またはVII期のものと思われる。



第7図 出土土器・陶器 [VII・VIII・全期] [S=1/6]

まとめ

宮ヶ瀬遺跡群では7世紀末から奈良時代の8世紀前半はⅠ・Ⅱ期あたるが、わずかな土器が出土しているだけである。奈良時代後半の8世紀第2四半期後半から平安時代初頭の8世紀末にかけては、土器・陶器の出土は全くみられなくなる。しかし、宮ヶ瀬遺跡群ではⅢ期からⅦ期にあたる9世紀初頭から10世紀後半代には150年以上の長期間にわたり、土器・陶器がまとまって継続的に出土している。Ⅲ・Ⅳ期の9世紀初頭から中葉にかけては地元の相模の土器だけでなく、武藏からは土師器壺と甕、須恵器壺・椀・蓋等、甲斐からは土師器壺が搬入され、この時期には宮ヶ瀬遺跡群が周辺の各地と関係が深くなっていることを示している。V～Ⅶ期の9世紀後半から10世紀後半には相模からの土師器甕の供給は武藏の土師器甕と同様に続くが、土師器壺の供給は減少し、それに反比例するように南多摩窯跡群御殿山窯の製品が多量に搬入されるようになる。甲斐型の土師器壺と甕は少数ながら一定量の出土がみられ、また、灰釉陶器は9世紀中葉以降にみられるようになる。V～Ⅶ期の宮ヶ瀬遺跡群は土器の様相からみる限り相模川下流域との関係が薄れ、高座郡北部から多摩丘陵西部地域と共に通する部分が大きくなっている。10世紀後半から11世紀代のⅧ期には土器の出土数は7世紀末から8世紀前半のⅠ・Ⅱ期と同様に激減する。

以上みてきたことから、奈良・平安時代の宮ヶ瀬遺跡群における土器・陶器の出土量からみた画期は、①7世紀末から8世紀にかけて、②8世紀第2四半期後半、③9世紀初頭、④10世紀後半に認められよう。①では少数の遺物がみられるようになり、②では遺物が全くみられなくなる。③では多くの遺物が出土し、④では遺物の出土量が極めて少なくなる。

(河野喜映)

註

- 1 長谷川 厚 1990.3 「出土土器の編年と組成の特色」『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
長谷川 厚 1990.12 「土器について」『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
服部敬史ほか 1981.5 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号
服部敬史 1983.1 「窯址出土須恵器の編年と背景 南武藏の窯址」『神奈川考古』第14号
服部久美 2000.3 「若干の予察 遺物について」『南多摩窯跡群Ⅲ』
福田健司 2002.12 「土器編年と実年代」『落川・一の宮遺跡 Ⅲ 総括編〔第二分冊〕』
- 2 南(No 2) 遺跡 H 1号住居址(旧) → H 2号住居址(新)
表の屋敷(No 8) 遺跡 H 3号竪穴住居(旧) → H 4号竪穴住居(新)
- 3 表の屋敷(No 8) 遺跡のH 3・4号竪穴住居。点(ドット)を用いて出土位置が公表されていなければ、この重複遺構から出土した遺物群を資料として使用できなかったことになる。
- 4 資料や挿図版下の作成、出土状況の検討にはプロジェクトの全員の参加・協力を得た。
- 5 南多摩窯跡群御殿山窯産の須恵器の編年研究では、編年の後半に位置付けられていたG 5窯式はG 5窯式古段階・G 5窯式・G 5窯式新段階の三段階に分けられた(註1 服部ほか 1983.1)。しかし、窯跡群の発掘調査による出土品の再検討で、G 5窯式自体は前半と後半に分けられるとしている(註1 服部 2000.3)。消費地で少数のG 5窯式の壺・椀を根拠に時期を細分するのは困難なので、今回の時期区分では重複遺構の検討や共伴する相模型壺と甲斐型土器などの変遷を利用してG 5窯式の須恵器が伴う遺構群を前半と後半に分けた。
- 6 G 5窯式の須恵器壺と椀が出土したが、VI期・VII期に時期区分できない住居址が宮ヶ瀬遺跡群では4棟ある。

第4表 宮ヶ瀬遺跡群出土土器・陶器属性表

時期区分	図版No	遺跡名	遺構名	器種	種別・産地	住居内の出土位置	法量(cm)			備考	報告書の時期比定	掲載報告書
							口径	底径	器高			
I期	1	表の屋敷(No8)	14号住	土師器壺		床面直上	14.0		4.0		7世紀末～8世紀初頭	X III分冊
	2	ナラサス(No15)	遺構外	土師器壺		—	12.5				古墳時代後期	II分冊
	3	表の屋敷(No8)	5号住	土師器甕(長胴甕)		床面直上	18.5				8世紀前半以降	X III分冊
	4	表の屋敷(No8)	5号住	土師器甕(長胴甕)		カマト [†]					8世紀前半以降	X III分冊
	5	表の屋敷(No8)	5号住	土師器甕(胴張甕)		床面直上	19.5				8世紀前半以降	X III分冊
II期	6	馬場(No6)	遺構外	土師器壺	盤状壺	—	14.2			内外面赤彩	律令期初頭	X III分冊
	7	北原(No9)	遺構外	土師器壺		—	13.1	8.2	3.3		奈良時代	III分冊
	8	馬場(No6)	遺構外	土師器甕		—	19.0				律令期初頭	X III分冊
	9	北原(No9)	遺構外	土師器甕(長胴甕)		—	21.3	8.6	36.0		奈良時代	III分冊
III期	10	表の屋敷(No8)	6号住	土師器壺	相模型	床面直上	12.2	8.5	3.6		8世紀末～9世紀初頭	X III分冊
	11	馬場(No6)	3号住	土師器壺	相模型	床面直上、壁際	12.2	8.4	3.7		9世紀前半～中葉	V分冊
	12	馬場(No6)	1号住	土師器壺	相模型	カマト [†]	10.3	6.0	3.4		9世紀前半	V分冊
	13	北原(No10)	6号住	土師器壺	相模型	床下土坑	12.0	7.6	3.9		9世紀前半	IX分冊
	14	馬場(No3)	6号住	土師器壺	相模型	床面直上、壁際	12.1	7.5	4.1	灯明皿	9世紀前半	VII分冊
	15	馬場(No3)	7号上坑	土師器壺	相模型	覆土中層～下層	11.9	7.2	3.8	灯明皿、底部裏墨書「寺」	9世紀中頃	VII分冊
	16	馬場(No3)	6号住	土師器壺	相模型	掘り方	11.7	6.8	3.6		9世紀前半	VII分冊
	17	馬場(No6)	3号住	土師器壺	南武藏型	床面直上	12.6	7.0	3.8		9世紀前半～中葉	V分冊
	18	表の屋敷(No8)	10号住	土師器壺		カマト [†]	12.0	7.4	3.1	灯明皿	9世紀前半～中葉	X III分冊
	19	馬場(No6)	3号住	土師器壺	北武藏型	床面直上	14.4	9.9	4.2		9世紀前半～中葉	V分冊
	20	北原(No10・11北)	2号住	土師器高台付椀	甲斐型	覆土上～中層、カマト [†] 掘り方	9.8	5.5	4.0	高台内に墨書「村」	9世紀前半	X V分冊
	21	北原(No10・11北)	2号住	土師器壺	甲斐型	覆土中層、カマト [†]	10.0	6.4	4.1	底部外面に墨書「十万」	9世紀前半	X V分冊
	22	表の屋敷(No8)	6号住	土師器壺	甲斐型	覆土下層、床面直上	10.6	5.5	4.0		8世紀末～9世紀初頭	X III分冊
	23	表の屋敷(No8)	10号住	土師器壺	内黒土器	カマト [†] 、床面直上、覆土上層	11.1	6.6	4.2		9世紀前半～中葉	X III分冊
	24	北原(No10)	6号住	須恵器壺	御殿山窯	床面直上、周溝、掘り方、覆土下層	13.0	7.4	3.1		9世紀前半	IX分冊
	25	北原(No10)	6号住	須恵器壺	御殿山窯	周溝、覆土中層	12.2	6.0	3.6		9世紀前半	IX分冊
	26	北原(No10)	6号住	須恵器壺	御殿山窯	覆土下層	10.7	6.2	3.5		9世紀前半	IX分冊
	27	馬場(No6)	3号住	須恵器壺		床面直上、カマト [†]	12.5	6.0	3.9		9世紀前半～中葉	V分冊
	28	北原(No10・11北)	2号住	須恵器壺		覆土中層	12.3	6.7	3.2		9世紀前半	X V分冊
	29	北原(No10)	6号住	須恵器壺	南比企窯	覆土中～下層、掘立、遺構外	12.8	5.8	4.1		9世紀前半	IX分冊
	30	馬場(No6)	3号住	須恵器壺	南比企窯	床面直上、壁際	12.9	6.1	4.0		9世紀前半～中葉	V分冊
	31	馬場(No6)	5号住	須恵器壺	南比企窯	カマト [†]	11.4	5.8	3.2		9世紀前半	V分冊
	32	南(No2)	3号住	須恵器蓋	御殿山窯	床面直上	16.7				9世紀中葉～後半	VII分冊

時期区分	図版No	遺跡名	遺構名	器種	種別・产地	住居内の出土位置	法量(cm)			備考	報告書の時期比定	掲載報告書
							口径	底径	器高			
III 期	33	北原(No10)	6号住	須恵器蓋	南比企窓	カマツ					9世紀前半	IX分冊
	34	北原(No10)	6号住	須恵器蓋	南比企窓	覆土上層、棚覆土	18.2				9世紀前半	IX分冊
	35	表の屋敷(No8)	6号住	須恵器坏	御殿山窓	床面直上	12.5	9.2	1.9	胴部破損面摩耗・整形	8世紀末～9世紀初頭	X III分冊
	36	北原(No10)	6号住	須恵器椀	南比企窓	掘り方、カマツ	16.2	7.2	5.9		9世紀前半	IX分冊
	37	馬場(No3)	6号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマツ	26.5	5.7	38.5		9世紀前半	VII分冊
	38	北原(No10・11北)	2号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	覆土中～下層、カマツ	23.4				9世紀前半	X V分冊
	39	北原(No10・11北)	2号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマツ	23.0				9世紀前半	X V分冊
	40	北原(No10)	6号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	掘り方、カマツ・掘り方、周溝、床下土坑	25.2				9世紀前半	IX分冊
	41	表の屋敷(No8)	10号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマツ	19.9				9世紀前半～中葉	X III分冊
	42	表の屋敷(No8)	10号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	20.6				9世紀前半～中葉	X III分冊
	43	北原(No10・11北)	2号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	覆土下層、カマツ	32.6				9世紀前半	X V分冊
	44	馬場(No6)	3号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	カマツ	22.2				9世紀前半～中葉	V分冊
	45	北原(No10)	6号住	土師器小形甕	相模型	覆土下層、カマツ	10.7	6.1	10.5		9世紀前半	IX分冊
	46	北原(No10)	6号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	覆土上層、掘り方、カマツ		6.8			9世紀前半	IX分冊
	47	北原(No10)	6号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	周溝、掘り方		6.0			9世紀前半	IX分冊
	48	南(No2)	3号住	土師器台付甕	武藏型	床面直上	13.7	4.6	17.6	脚部欠損後、底面を研磨整形。	9世紀中葉～後半	VIII分冊
	49	馬場(No6)	3号住	土師器小形台付甕	武藏型	床面直上	10.3	7.9			9世紀前半～中葉	V分冊
	50	北原(No10)	6号住	土師器小形台付甕	武藏型	覆土下層、カマツ・周溝、床下土坑	11.9				9世紀前半	IX分冊
	51	北原(No10)	6号住	土師器甕	武藏型	覆土下層、床面直上	14.0				9世紀前半	IX分冊
	52	馬場(No3)	6号住	土師器台付甕	武藏型	床面直上、壁際		10.1		脚部欠損部を研磨整形。	9世紀前半	VIII分冊
IV 期	53	馬場(No3)	1号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.5	7.2	3.7	灯明皿	9世紀中葉～後半	VIII分冊
	54	馬場(No3)	1号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.1	6.8	4.0		9世紀中葉～後半	VIII分冊
	55	馬場(No3)	3号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.3	7.2	4.0		9世紀前半～中葉	VIII分冊
	56	馬場(No3)	7号住	土師器坏	相模型	床面直上	11.6	7.0	3.9		9世紀中葉～後半	VIII分冊
	57	馬場(No3)	5号住	土師器坏	相模型	カマツ	9.1	5.7	2.8	底部外面に墨書「寺」	9世紀中葉	VIII分冊
	58	馬場(No3)	1号礎石建物	土師器坏	南武藏型	床面	9.6	5.6	3.2	灯明皿	9世紀中葉	VIII分冊
	59	馬場(No3)	3号住	土師器坏	南武藏型	カマツ	12.4	6.8	4.0		9世紀前半～中葉	VIII分冊
	60	表の屋敷(No8)	7号住	土師器坏	甲斐型	覆土、掘り方	10.2	5.0	3.6		9世紀前半以前	X III分冊
	61	表の屋敷(No8)	3・4号住	須恵器坏	御殿山窓	3号住床面直上	10.8	5.8	3.5		9世紀中葉～後半	X III分冊
	62	表の屋敷(No8)	7号住	須恵器坏	御殿山窓	床面直上	11.8	6.0	3.8		9世紀前半以前	X III分冊
	63	表の屋敷(No8)	7号住	須恵器坏	御殿山窓	床面直上	11.3	6.0	3.0		9世紀前半以前	X III分冊
	64	馬場(No3)	3号住	須恵器坏	御殿山窓	床面直上	11.8	6.3	3.3		9世紀前半～中葉	VIII分冊
	65	表の屋敷(No8)	7号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	覆土下層～床面直上	26.0	6.0	33.0		9世紀前半以前	X III分冊
	66	馬場(No3)	5号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマツ	24.8				9世紀中葉	VIII分冊

IV 期	67	馬場(No3)	5号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマト*	25.6				9世紀中葉	VII分冊
	68	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	3号住覆土下層、カマト*	24.2				9世紀中葉～後半	X III分冊
	69	馬場(No3)	5号住	土師器甕	相模型	覆土下層	20.0				9世紀中葉	VII分冊
V 期	70	南(No2)	9号住	土師器坏	甲斐型	床面直上	11.5	4.8	4.2		9世紀後半	VIII分冊
	71	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、壁際	11.7	4.6	3.3		9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	72	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.8	5.2	3.5		9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	73	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、壁際	12.5	5.3	3.8		9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	74	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	13.1	5.0	4.2		9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	75	馬場(No3)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	15.0	6.5	5.5		9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	76	大野原(No13)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上、壁際	15.0	5.7	5.5		9世紀後半～10世紀前半	X IV分冊
	77	馬場(No3)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	23.8	5.8	32.3		9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	78	南(No2)	9号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	掘り方	22.4				9世紀後半	VIII分冊
	79	馬場(No3)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上、壁際	24.6				9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	80	南(No2)	9号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマト*		5.6			9世紀後半	VIII分冊
	81	馬場(No3)	4号住	土師器甕	武藏型	床面直上	13.6				9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
	82	馬場(No3)	4号住	土師器台付甕	武藏型	床面直上		9.5			9世紀末～10世紀初頭	VII分冊
VI 期	83	表の屋敷(No8)	9号住	土師器坏	相模型	覆土下層	13.0	7.1	3.8		9世紀後半	X III分冊
	84	北原(No10)	1号住	土師器坏	相模型	覆土下層	12.7	6.8	5.0		10世紀前半	IX分冊
	85	表の屋敷(No8)	9号住	土師器坏	甲斐型	覆土下層	11.1				9世紀後半	X III分冊
	86	北原(No10)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土下層	12.4	5.4	3.9	体部外面に墨書「六万」	10世紀前半	IX分冊
	87	北原(No10)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土	13.2	5.4	3.8		10世紀前半	IX分冊
	88	南(No2)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土下層	13.0	5.4	3.6		9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
	89	南(No2)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	14.0	5.4	3.6	内面にカルシウム分付着。	9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
	90	南(No2)	4号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	14.2	4.8	4.9		9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
	91	南(No2)	4号住	須恵器高台付椀	御殿山窯	周溝	19.2	8.0	7.2		9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
	92	南(No2)	1号住	須恵器高台付皿	御殿山窯	覆土壁際	12.9	6.5	3.4	内面に墨書「人」	10世紀前半～中葉	VIII分冊
	93	表の屋敷(No8)	9号住	須恵器蓋	御殿山窯	カマト*	16.1	6.4	4.2		9世紀後半	X III分冊
	94	南(No2)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	28.0				9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
	95	北原(No10)	1号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	カマト*	23.0				10世紀前半	IX分冊
	96	南(No2)	1号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上	22.5				10世紀前半～中葉	VIII分冊
	97	南(No2)	4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上		5.8			9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
VII 期	98	表の屋敷(No8)	9号住	土師器小形甕	相模型	床面直上、周溝	12.7				9世紀後半	X III分冊
	99	南(No2)	1号住	土師器甕	武藏型	床面直上	17.0				10世紀前半～中葉	VIII分冊
	100	南(No2)	4号住	土師器甕	武藏型	覆土、カマト*	13.0				9世紀末～10世紀前半	VIII分冊
	101	北原(No10)	1号住	土師器甕	類武藏型	カマト*崩落土	21.0				10世紀前半	IX分冊
	102	北原(No10)	1号住	土師器台付甕	類武藏型	覆土下層		9.1			10世紀前半	IX分冊
VIII 期	103	表の屋敷(No8)	9号住	土師器甕	甲斐型	覆土下層	24.8				9世紀後半	X III分冊
	104	表の屋敷(No8)	13号住	土師器坏	相模型	床面直上	12.2	5.8	3.8		10世紀前半	X III分冊
	105	北原(No9)	2号住	土師器坏	相模型	旧カマト*	11.8	5.0	3.9		9世紀後半	III分冊

時期区分	図版No	遺跡名	遺構名	器種	種別・产地	住居内の出土位置	法量(cm)			備考	報告書の時期比定	掲載報告書
							口径	底径	器高			
VII期	106	表の屋敷(No8)	13号住	土師器皿	相模型	床面直上	12.8				10世紀前半	X III分冊
	107	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器坏	甲斐型	4号住床面直上、覆土	14.5	4.0	4.8		9世紀中葉～後半	X III分冊
	108	南(No2)	2号住	土師器坏	甲斐型	掘り方	13.8				9世紀後半	VIII分冊
	109	表の屋敷(No8)	13号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	11.2	4.8	3.2		10世紀前半	X III分冊
	110	ナラサス(No15)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	12.8		3.7		10世紀前半	II分冊
	111	表の屋敷(No8)	3・4号住	須恵器坏	御殿山窯	4号住床面直上	13.5	4.8	3.8		9世紀中葉～後半	X III分冊
	112	ナラサス(No15)	1号住	須恵器坏	御殿山窯	床面直上	14.2		4.9		10世紀前半	II分冊
	113	北原(No10)	5号住	灰釉陶器碗		炉址横攪乱	14.4	6.6	5.1	黒笛90号窯式	10世紀前半	IX分冊
	114	ナラサス(No15)	1号住	灰釉陶器椀		床面直上	17.4		4.9	折戸53号窯式	10世紀前半	II分冊
	115	ナラサス(No15)	1号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面	30.0				10世紀前半	II分冊
	116	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	4号住かまト	24.1				9世紀中葉～後半	X III分冊
	117	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(胴張甕)	相模型	4号住かまト			6.5		9世紀中葉～後半	X III分冊
	118	表の屋敷(No8)	13号住	土師器甕(長胴甕)	相模型	床面直上			6.0		10世紀前半	X III分冊
	119	北原(No9)	2号住	土師器甕	武藏型	覆土	13.1				9世紀後半	III分冊
	120	北原(No10)	5号住	土師器台付甕	武藏型	掘り方	12.0				10世紀前半	IX分冊
	121	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕(長胴甕)	武藏型	4号住かまト					9世紀中葉～後半	X III分冊
	122	南(No2)	2号住	土師器甕	甲斐型	床面直上	17.8				9世紀後半	VIII分冊
	123	表の屋敷(No8)	3・4号住	土師器甕	甲斐型	4号住覆土上層～下層			8.8		9世紀中葉～後半	X III分冊
	124	ナラサス(No15)	1号住	須恵器長頸瓶	御殿山窯	床面直上			10.4		10世紀前半	II分冊
	125	ナラサス(No15)	1号住	須恵器甕	御殿山窯	床面直上					10世紀前半	II分冊
VIII期	126	ナラサス北(No15北)	1号住	ロクロ土師器高台付坏		床面直上	15.6	9.3	6.0		11世紀前半	II分冊
	127	表の屋敷(No8)	12号住	ロクロ土師器坏		床面直上	13.4				10世紀前半以前	X III分冊
	128	北原(No10・11北)	1号住	土師器坏		掘り方	8.7	5.2	2.3		11世紀前半	X V分冊
全期	129	馬場(No6)	6号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土	13.0	6.2	3.8		10世紀前半以前	V分冊
	130	北原(No10)	7号住	須恵器坏	御殿山窯	覆土	12.6	5.0	3.8	体部外面に墨書「六方」	10世紀前半	IX分冊
	131	北原(No10)	2号住	灰釉陶器椀		覆土中層、掘り方	12.6	5.4	4.5	黒笛14号窯式	10世紀前半	IX分冊
	132	北原(No10)	7号住	須恵器長頸瓶	御殿山窯	覆土					10世紀前半	IX分冊
	133	北原(No10)	2号住	須恵器突帶付壺		覆土上層、周溝	22.2			胴部の実測図は天地逆	10世紀前半	IX分冊
	134	北原(No10)	2号住	灰釉陶器長頸瓶		覆土	9.3				10世紀前半	IX分冊

【注】 1 「時期区分」および「図版No」欄は、第3～7図に対応する。

2 「法量」は実値・推定値の区別はせず、「器高」欄には口縁部～底部まで遺存している場合のみ明記している。

3 「住居内の出土位置」は基本的に報告書に掲っているが、報文で記載されていないものは出土分布図から読み取って判断している。

4 「報告書の時期比定」は、堅穴住居の所産(あるいは廃絶)時期を示しており、必ずしも個々の遺物の生産年代とは一致するものではない。

5 「掲載報告書」欄の分冊は、下記の通りである。

上田 煉他1991.11「宮ヶ瀬遺跡群II」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21

市川正史他1993.2「宮ヶ瀬遺跡群III」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21

近野正幸他1995.3「宮ヶ瀬遺跡群V」かながわ考古学財団調査報告4

富永樹之 1996.3「宮ヶ瀬遺跡群VI」かながわ考古学財団調査報告9

近野正幸他1996.3「宮ヶ瀬遺跡群VII」かながわ考古学財団調査報告10

市川正史他1997.1「宮ヶ瀬遺跡群IX」かながわ考古学財団調査報告15

近野正幸他1997.3「宮ヶ瀬遺跡群X III」かながわ考古学財団調査報告19

鈴木次郎他1998.3「宮ヶ瀬遺跡群X IV」かながわ考古学財団調査報告40

市川正史他1998.3「宮ヶ瀬遺跡群X V」かながわ考古学財団調査報告41